

## 少し深入り 文化のみちQ&A－2

Q：このエリアでは、なぜ、加工陶磁器業が盛んになったの？

A：理由は大きく3つあります。

一つ目は、1890年頃、「文化のみち」エリアは名古屋市内の最東北端に位置し、商業地として未成熟で、武家屋敷跡も多かったため、広大な敷地を安く手に入れるチャンスに恵まれていたことが一つ。

二つ目は、海外へ輸出する品物は、名古屋市中心部を流れる堀川でハシケ船に積んで四日市まで持って行って、それから東西の貿易港へ送るのを常としていたためです。名古屋港が開港（1907年）して以降も、1955年頃まではハシケ積みのウエイトの方がはるかに大きかったので、わざわざ港近くに移動する必要がなかったわけです。

三つ目は、上絵付する前の陶磁器素地供給地である瀬戸、東濃にとって、東北部は名古屋の玄関口に当たり、交通、運輸上好立地だったためです。

さらに、1896年には、森村組（ノリタケカンパニーの母体）が東京、京都の専属画工場を名古屋槇木町（東区）に結集するという、名古屋の陶磁器絵付加工にとって画期的な出来事が起きています。

Q：なぜ、広大な敷地を手に入れる必要があったの？

A：名古屋の陶磁器業は、1889年頃まで、商業的色彩が強く、物流に便利な市中央部に店舗を構える傾向が強かったのですが、1890年～1900年にかけて輸出向けの比重が一挙に高まって、単なる中継拠点としてではなく、絵付加工のウエイトが高くなりました。

これにより、店舗の敷地のみでなく、絵付加工用の土地が必要となったことから、その当時、広大な武家屋敷の敷地が残り、地価も安い「文化のみち」エリア周辺に陶磁器業が集まったのではないかと考えられます。